



WASEDA

MECHANICAL

ENGINEERING

## Newsletter

VOL.  
31

APR. 2009

2009年(平成21年)4月1日発行

# 環境・エネルギー研究科 2007年度から本庄早稲田で展開

勝田 正文 (理工学術院教授)



科学技術と社会の幸福を不可分のものとして追求する理工学部の創立の理念を踏まえ、環境・エネルギーに関する研究の高度化と社会的実践を推進するために、理工学研究科機械工学専攻での実績と構想を基盤として、特に、産業、民生・交通等の環境・エネルギー問題に技術・政策的に挑戦する新しい領域を対象とする専攻として2005年度に設置された環境・エネルギー専攻は、この分野に特色ある方向性を打ち出すことができたと自負しております。加えて、先のテーマについては、専任教員の実績と展開中のプロジェクトなどからみて、国家レベルのプロジェクトを通して、環境評価法の国際標準や国レベルの政策決定にも寄与できる体制にあると考えることができます。

しかしこのためには、環境・エネル

ギー分野における教育・研究体制のなお一層の拡充と複数研究科間との不断の協調が必要なことから、環境・エネルギー専攻修士課程と機械工学専攻(当時)博士後期課程を母体とする新しい研究科を2007年から、本庄早稲田の地に展開するに至りました。以下に、設置に関する考え方や基本的な構想について説明いたします。

## (1) 環境・エネルギー研究科 設置の背景および趣旨

環境・エネルギー問題に対するわが国の対応については、企業や国レベルにおける各種環境対策技術の開発やエネルギー政策において、少資源国・少エネルギー国であるが故に技術力と政策立案力とをもって対処・克服してきた経緯があり、また、市民レベルでの環境意識の高揚も非常にめざましいも

のがあります。その結果として、先進的な経済大国でありながら、例えば国民一人あたりの二酸化炭素排出量が先進国で最少と一定の成果も挙げております。しかしながら今後は、エネルギー廃棄物管理におけるリスク分散や、より複雑に因子が絡み合い高度な解決方法等が求めら

れる環境・エネルギー問題への対応も必要とされ、そのためには国民のライフスタイルや産業構造の改革、市場ならびに行財政等の一層の変革が求められるとともに、国家・社会・企業等の理

## CONTENTS

環境・エネルギー研究科	1~2
山本忠興先生のこと シリーズ①	3~4
2007年機友会各賞発表	4~5
今こんなことやっています・INFORMATION	6~7
バネルディスカッションに参加して	8
理工学部創設100周年	9
工場見学	10
機友会ゴルフコンペ開催報告	11
ホームカミングデーの報告	12
機友会イブニングサロン	12
松浦佑次先生を偲ぶ “アルプス思い出鉄道”	13
他大学から見た早稲田らしさ	13
万年幹事の独り言	14
第28回モビリティシンポジウム 開催について	14
サポート費・お願い・会員訃報	15
事務局からのお願いとお知らせ	16



念の構築や社会システム、制度の整備、技術の革新が必要とされております。

一方、わが国周辺のアジア太平洋地域には、今後の発展が期待される国々が存在し、わが国はこうした国々への経済的支援も活発に行い、企業進出も盛んに行われております。これからわが国には、こうした国々との連携の中で、グローバルな視点をもった循環型経済社会を構想する義務があります。同時に、世界屈指の経済大国であり、過去に大きな公害問題を体験したわが国は、その解決のためのノウハウを世界に発信するとともに、教育の場を提供することが望まれております。

こうした情勢にあって本研究科は、環境・エネルギー問題への取り組みを、特に技術開発の戦略に重点を置きながら、政策、実践に適応していくことで、抜本的に解決していくための統合的な教育・研究を展開する、時代を先取りした教育・研究機関として活動できるものと確信いたします。

## (2) 基本構想

### (a) 学問領域統合型研究科としての特色－学内外との教育・研究での連携

学問領域統合型アプローチを実現するために、人材的にも体制的にも発展的な連携を可能とする教育・研究環境を整備いたします。特に人文・社会・自然・技術に関連する既存学部・研究科の教員と連携し、学問領域統合型アプローチを実践いたします。加えて学内にあっては、環境総合研究センターやプロジェクト研究所と、学外では、国内外の諸機関や地方自治体、企業、大学、NPO等と連携による研究展開を図ります。

### (b) 教育・研究に対する基本姿勢－現場・現物・現実主義による社会のための教育研究

科学的・工学的手法を駆使し、学問領域統合型アプローチによる、「現場・現物・現実」に基づいた、OJTも活用した実践的・戦略的な教育・研究体制を整備して、究明と応用

に熟達した人材の育成に努めます。さらに、本庄早稲田地域を社会実験場として位置づけ、市民との共創型教育・研究を展開いたします。

### (c) 育成する人材像－統合的能力・総合的人間性および専門分野の知恵・知識

本研究科は環境・エネルギー分野において専門的知識・知恵を有する高度職業人の養成と、より深い知識と高い倫理観を持って環境・エネルギー問題等を攻撃し、社会に貢献できる実務者や研究者の養成を行います。統合的能力、総合的人間性、専門分野の知識・知恵をバランスよく有する人材を輩出いたします。

### (d) 本庄展開の意義－地元自治体や住民との連携による『社会実験場』の構築

本研究科は本庄キャンパスおよび大久保キャンパスを基盤に教育・研究を開拓いたします。本庄早稲田での展開は、地元自治体や住民との連携による「社会実験場」の整備にあります。

### (e) 環境総合研究センターとの連携による独立採算的運営のための基盤構築

本庄キャンパス展開という遠隔地展開であることを考慮し、環境総合研究センターとの連携による学外資金獲得、対外機関との積極的連携などの努力を行い、独立採算的運営を行います。

## (3) 本庄展開の現状

修士課程については、2009年3月で完成年度を迎えます。教員組織は理工学系の強力なご支援もいただき、兼任も含め11名（専任は8名）、広報の効果もあって徐々に入学志願者も増加しております。また、博士課程には社会人や留学生を含め20名以上が在籍しております。

研究プロジェクトは、環境省はじめNEDO、文部科学省からの競争的資金を獲得しており、潤沢な状況にあります。特に、今年度から「アジア・アフリカ科学技術協力の戦略的促進：戦略的環境リーダー育成拠点」（通称：デュアル対応環境リーダーの育成）に私立大学として唯一採択され、本年9月を目指してカリキュラム等の充実を図っております。

同時に、北京大学との共同大学院計画プロジェクトも9月スタートを目指して、すでに複数回にわたる先方との協議を終えております。今後、風通しをさらに良好なものとして、学生や教員が自由に往来できるようなシステムを構築してまいります。

以上のような理想を掲げ、出発いたしました。校友諸兄におかれましては、よろしくご支援、ご指導お願い申し上げます。



田島 清瀬（機械工学科名誉教授 機友会相談役）

機友会から、1921年（大正10年）から1943年（昭和18年）まで23年間に亘って戦前の理工学部長を務めた山本忠興（ただおき）先生の事跡を書くように依頼された。これは、私が理工学部創設100周年に併せて催された早稲田大学奉仕園創立100周年記念のシンポジウムでパネリストとして山本先生の話をしたことが発端であると思う。

山本先生が活躍された時代背景も社会環境も変わっているから直接現在に当てはめて手本とするわけには行かないだろうが、我々の理工学部が背負っている歴史を知ることばかりなく、先生の足跡は時代や環境を超えて感動を与えてくれるのである。

まず先生の生い立ちから話を進めよう。

先生は幼児母を失い祖父母の手で育てられた。明治31年（1892年、以下西暦は略す）春、高知中学を主席で卒業したが、先生の入学時の改革で英語、数学、物理、化学などの優秀な教師が揃っていた。先生の2、3級上に寺田寅彦がいた。翌年に第一高等学校第2部入学、明治35年に東京帝国大学工科大学電気工学科に入学した。当時父忠秀の妹の嫁ぎ先である竹内明太郎<sup>注)</sup>の家から通学した。竹内明太郎の末弟は先生の3歳年上の吉田茂である。

大学時代は日露戦争などで、国民が互いの自覚を促す声がうるさい時代であり、専ら通信分野に使われていた電気を動力に応用しようという時であった。大学では鳳秀太郎博士の薰陶を受け、同級生には電気事業に足跡を残した肥田丈夫（電気試験所第2部長）、高津清（電気試験所長）、小穴（おあな）秀一（小穴製

作所代表取締役）、黄金井晴正（芝浦製作所原価部長）、小宮次郎（東京横浜電鉄取締役技師長）の各氏がいる。

大学の最後の学年の実習生活では明治37年9月から今の中線（当時、甲武鉄道）の電化工事に従事した。これは日本初の鉄道電化で、今は取り去られた柏木発電所の公式運



転が開始されていた。明治38年7月に24歳で大学卒業、実習で派遣されていた芝浦製作所に設計技師として入社した。その後3年半を設計室で過ごし最後の1年は東京帝国大学電気工学科講師として電気機械の設計製図を担当した。

叔父竹内明太郎から海外留学を勧

められ、明治41年11月芝浦製作所を退職、留学に備えてドイツ語を学び、翌年4月28歳のときに渡欧、バーデン大公国首府カールスルーエ市の工科大学教授アーノルド博士の門下生として約1年半電気機械設計を研究した。博士から、「研究心旺盛にして、独創の才に富む」ことを認められ、博士の紹介状を携えて米国に渡り、芝浦製作所が提携していたG.E.社の顧問技師長スタインメツ博士の下で勉強した。同博士の部屋で机を並べて働いていた人々は、後年世界的に有名になった博士の配下が多い。このころは芝浦製作所の在外駐在員として、東海道線の電化設計などをされたようである。沼津までの電化が完成したのはずっと後年のことだから、設計時は夢を描く感であっただろう。

当時早稲田大学では、私財を大学に寄付して理工科商議員であった竹内明太郎や電気工学科顧問浅野応輔博士が大学の理工科改革の方針に添い、大学卒業者を講師に選ぶことの第一の矢を山本先生に立てた。明治45年帰国の途上にあった先生は、サンフランシスコで叔父の竹内明太郎から大学の意向を聞き、芝浦製作所設計主任の地位を約束されていた先生は、悩んだ末に私学の電気工学科で技術者養成のために働く道を選んだ。

6月に帰朝すると直ぐに早大からの招聘が正式に決定し、8月の教職員慰労会の席で大隈総長に就任の挨拶をしたのである。電気工学科の学生を引率して、明治天皇の靈柩が二重橋を発するのをお送りしたのが、学生とのはじめての対面で、31歳の時であった。

教場での先生は、終始一貫穏やか

であり、親しげであり、円満であった。割合に早口だったので講義の内容は莫大になり、筆記をする学生は悲鳴を挙げた。そのときは「モーターの講義ですから、少し速く回そうと思ったのですよ」とユーモアで教場を爆笑させた。講義中でも、廊下ですれ違うときでも、教務で学生を呼びつけるときも、先生の顔から笑みが消えなかった。

先生は産業界の卒業生採用に努力され、卒業生の中には先生の期待を裏切って迷惑を掛ける者もあったが、先生が怒ることはなかった。先生はスポーツ関係でも活躍され、オリンピックや海外遠征にも選手を引率して行かれたことも多かった。選手が競技に勝つと非常に喜ばれたが、負けて謝りに

行っても「ああ、その位で丁度いいです。丁度いいです。」と言われたそうである。

先生の門下生であった、堤秀夫教授は「教授の多くは自分の受けた学校の気風をそのまま教える場所に持ち込むのが普通であるが、山本先生はこれを極力排して、常に新しい試みを敢行したもので、これらが先生の偉大な信念の表れである」と述べているが、戦前の理工学部を隆盛に導き、電気通信、工業経営の学科を立ち上げ、鋳物研究所を発足させるなどしたのは、広範かつ新鮮、そして将来を見通す先生の該博な知識と決断の産物である。また、早大理工学部の経営に日夜腐心する一方、科学者としての研究にも心血を注い

だ。学生達から信頼されたのは先生の人格の力にもよるが、弛まぬ学者としての実力によるのである。(以下次号)

編集者注：竹内明太郎(1860-1928)は高知県出身で、父竹内綱も政治家で実業家、戦後の総理大臣吉田茂は実弟である。彼は近代日本の発展には工業化が必要と考えて、炭鉱事業をはじめ、それに関連した小松製作所(現コマツ)などを創設し経営にあたった。また彼は、早稲田大学理工学部設立の時には多額の寄付をしたうえ、自分で唐津に工科大学を設立しようとして私費で育成していた研究者すべてを教授として送り込んでくれた、早大理工学部の大恩人である。早稲田機友会記念誌-90周年-に深町一彦氏が執筆された「無名の英雄竹内明太郎」を是非参照してください。

また、早稲田大学理工学部に竹内記念ラウンジが設けられており、入口に竹内明太郎の功績が掲げられています。

## W.M.E AWARD 2007 機友会各賞発表

2007年度機友会特別賞1件と奨学論文賞1件が承認され、それぞれ総会の席上で発表、表彰されました。

### 機友会特別賞

## 早稲田エコランクラブ 2007年度の活動について

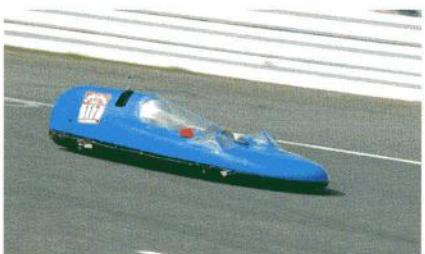
代表 鈴木 晋太郎

1リットルのガソリンで車はいったい何km走ることができるのか？燃費という観点から走行性能を追及するモータースポーツがエコランである。昨今の資源問題によりエコという言葉は身近なものになったが、エコランの大会であるHondaエコノパワー燃費競技大会は、それに先駆け1981年に鈴鹿サーキットにて全国大会がはじめて催され、2007年の大会にて第27回を迎えた。私達早稲田エコランクラブ

は、97年よりツインリンクもてぎに舞台を移した全国大会とテクニカルなコースでいまだ健在な鈴鹿大会に参加し、より良い結果を残すために日々活動を続けている。

早稲田エコランクラブは現在4台のマシンを保有し、マシンごとに1つのチーム、つまり4チームに分かれて作業を行っている。チームに分かれているとはいえ、同じ作業場で活動をしており、メンバー間の親交もチームの垣

根を越えて広がっている。サークルということもあり、日頃の活動は愉快な会話が展開したり、笑いあったりと和やかだが、大会当日やその直前のような時では、厳しい言葉が飛んだり、本気で怒る場面もある。それも、メンバー達がエコランという競技に対して真摯な態度を向けているからであり、自分自身の責任を自覚しているからである。このような環境下において、と



きに励まし、ときに競い合い、お互を高めあうように私たちは活動を続けている。

2007年の鈴鹿大会においては、Neo New Machineが471.520km/l、TAMIKOが457.321km/lという記録を残し、大学・短大クラスにおいて2位と3位を獲得することができた。鈴鹿サーキットのコースはコーナーが多く、起伏に富むという難度の高いコースである。特に上り坂は燃費をよくするために極力燃料を絞っているエコランマシンにとっては脅威的な存在であり、例年、鈴鹿大会では多くのマシンが完走すらままならない。しかし、鈴鹿でのレースがそのように厳しいものであるということを、私達は昨年時にも経験していたし、多くの先輩からも教わっていた。だからこそ、大会に向けて準備に準備を重ねた。Neo New Machineは出走直前にキャブレターがフローするというアクシデントに見舞

われ、一瞬のうちに焦りと不安が募ったが、アクシデントに即座に対応し、あらためてスタート地点に立つときは、いつもどおりの状態にまでマシンを仕上げていた。一方でTAMIKOはトルクを得るための駆動関係を改善して大会にのぞみ、燃料調整のセッティングに努めた。その成果が発揮され、2007年の鈴鹿では完走を達成するだけでなく、上記のようなすばらしい結果を得ることができた。このような結果を得られた充足感と達成感と、仲間たちと喜びを分かち合えたことが非常に印象深かった。

ツインリンクもてぎでの全国大会はオーバルコースで行われ、コースがシンプルであるため、よりマシンの性能が浮き彫りになる。この大会では、XENNOSがインジェクションの調整と、ホイールの抵抗を少なくするためのバランス調整に重点を置き、優勝記録1787.879km/lに迫る、1252.878km/l

という好記録を残した。

私達は全国大会を境に代交代する、つまりこの全国大会が一年間の集大成となる。三年間にわたり、このエコランという競技に参加し、より良い記録を目指して活動を続けてきたが、どこまで進もうとも向き合わねばならない課題にぶつかるばかりだった。そのたびに試行錯誤し、一喜一憂した経験は良い思い出であるとともに、これから先の人生において活かすことできる貴重な体験であったと思う。正直なことをいえば、まだまだやり残したことはあるのだが、それは信頼する後輩たちの新しい代に任せ、温かく見守っていきたいと思う。最後に、エコランを通じて出会った人々と私達の活動が多くの人々の協力の上に成り立っていることに対して感謝の意を示すとともに、早稲田エコランクラブの今後の健闘を祈って、この文章のまとめとする。

## 機 友 会 奨 学 論 文 賞

### C言語によるCUIゲームの作成

野又 裕道（学部2年）

C言語とは、B言語をもとにデニス・リッチャーが主体となって開発したプログラミング言語である。UNIXの中核はC言語で記述されており、組み込みシステム向けのプログラムを作成するときなどに使われる。

僕は、大学の授業でマイコンのプログラミングを行った際に、このC言語を習った。授業では基本的な構文しか扱わなかったので少し物足りなく感じ、独学し始めた。勉強しているうちに自分で一から考えてプログラムを作ってみたくなり、今回、コマンドプロンプト上で動く簡単なCUI（Character User Interface）ゲーム（じゃんけんゲーム、

○×ゲーム）を作成した。

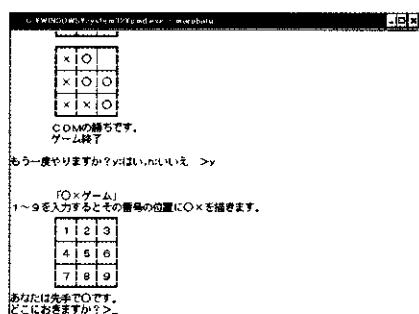
作成にあたり最も苦労したのが、人間の思考をプログラムにすることだった。普段自分がほとんど考えずに行っているようなことでも、プログラムにするとなるととても難しいことがわかった。

また、数字を入力してほしいときに、文字を入力すると誤動作を起こすといったことがないように、注意してプログラミングを行った。こんなことでも、比較的低レベルな言語であるC言語においては、完璧に実現するのが難しいことを知った。また、C言語で作成したプログラムは高速ではある

が、プログラマーの負荷が増えることを知り、C言語の長所と短所を知ることができた。

他にも、マクロを使って、後から修正しやすいようにプログラムを作ることや、擬似乱数を使ってランダムな動きを実現するのが難しかった。

見返してみると粗が目立つ部分もいくつかあるが、体験的かつ自発的な学習によりスキルアップをはかれたと思う。





# ただの飛行機好きなのかも知れませんが。

昭和61年院卒 町田 茂（林 洋次研）

## 1. はじめに

昭和61年3月に大学院を修了してからこの3月で丸23年経ちます。ある理由により最近大久保キャンパスに立ち寄ることが多くなり、結果として機友会事務局の佐々木洋子氏からの原稿依頼となり、大変僭越ながら私の文章がここに載ることとなった次第です。

中学生の頃、年に何回か羽田空港へ行く機会があり、漠然と「ヒコーキの仕事がしたい。」と感じたのは、その頃からと思います。大学院修了後、航空機メーカーを経て、現在（独）宇宙航空研究開発機構に勤めていますが、以下、なぜ大学で機械工学科を選んだか、このあたりからお話をさせていただきたいと思います。

## 2. なぜ機械工学科か

「ヒコーキの仕事」と言ったときに、それはパイロットなのか、整備の仕事か、空港での仕事か、または製造する方か。いろいろ考えた上でたどり着いた結論は、「もしものことを考えて将来つぶしの効く機械工学科に進む」ことでした。機械を分解することが好きだったこと、父も兄も技術系だったことから、機械工学科を選んだのは自然だったのかもしれません。

さて、その機械工学科で選んだ研究室は林洋次研で、テーマは粘弾性流体の研究でした。そのイメージから言うと流体力学、熱力学、材料力学などの他の研究に比べて、飛行機から一番縁遠い分野であると思います。「なぜ潤滑工学を選んだのか？」と問われれば、「大変そうな研究室を選択肢から除いていったときに、残ったから。」

と、極めて不謹慎な答えになることを白状いたします。しかし、後で分かることになるのですが、連続体のダイナミクスに触れた事はそれからの仕事や研究に多かれ少なかれ役立つこととなつたのです。

International Committee of Aeronautical Fatigue（2年に一度開かれる航空機構造の疲労問題に関する国際会議）の会議に出席したときに、隣の席の方に、「大学では何を専攻されましたか？」と聞かれました。航空機構造には縁遠いがと前置きして、「潤滑工学を勉強しました。」と答えたところ、「それはすばらしいことです。」と返事が返ってきました。つまり、潤滑工学で扱う範囲は連続体力学で、特に私の場合は粘弾性体のダイナミクスであったので多くの要素を包含している意味から、センスとして広い視野と知識を有している（はず）との理解なのです。実際、どれくらい広い視野と知識を有しているかは別として、大学院修了後航空機構造に関する比較的広い範囲の仕事に適応できたのは、大学での専攻分野の選択が間違っていたことを示していると考えます。

## 3. 航空機製造メーカーへ

大学院時代、記憶に残る、また航空機の安全に警鐘を鳴らす二つの事故がありました。

大学院修士課程2年の夏に山中湖でのテニスツアーへ参加し、夕方中央自動車道を使って東京方面へと帰っていったのですが、まさかその頭上をJAL123便が尾翼の一部を失ったまま飛行していたとは夢にも思いませんでした。1985年8月12日でした。

大学院2年の時、たまたま1月28日は修士論文作成のために研究室で徹夜作業をしてました。深夜気分転換のためにテレビをつけたところ、スペースシャトルチャレンジャーの爆発映像が何回も繰り返し放送されました。既にこの時は、富士重工業（株）航空宇宙事業本部への就職が内定しており、大げさに言うと何かの使命感を覚えました。

1986年4月に富士重工業（株）の宇都宮製作所に配属となり、航空機および宇宙機構造の強度保証業務（航空機構造の安全性を、解析や試験により保証する業務）に従事しました。その業務の中で記憶に残るのは、JAL123便の事故をきっかけとして行った「客室安全に関する研究」でした。「万が一事故が起こっても、一人でも多くの方々が生還するため」に、安全座席の研究開発や安全姿勢の研究を行い、その有効性については、人体ダミーを用いた衝突試験で実証しました。これには、遺族会の方々も見学に来られましたが、「航空機を製造する立場の者は、飛行安全を常に意識すべき」との意識を強く肝に銘じた経験でした。

9年間の強度保証業務後、中型ヘリコプタの複合材ローター（回転翼の部分）の開発業務に従事しました。ここでは、複合材料と言う材料特性そのものを設計することができる素材を使い、軽く、丈夫でしなやかだが、不安定な振動が無い回転翼の設計を経験しました。航空機全機はもとより部品を製造・販売する場合は、国による厳しい審査が必要ですが、本開発業務ではこの審査過程も経験したことその後大変役立つこととなつたのです。

## 4. 航空宇宙技術研究所 (現宇宙航空研究開発機構)

15年間の航空機製造メーカーでの経験後、もう少し広い範囲の航空安全の研究開発を行うために、2001年4月(独)航空宇宙技術研究所の門を叩きました。(2003年10月には、宇宙開発事業団と宇宙科学研究所と統合されて「宇宙航空研究開発機構」となる)当時研究所では、小型超音速実験機(通称ロケット実験機:2トンの実験機をロケットで打ち上げることから命名)の開発が進められており、構造班長として参画しました。2002年7月には第1回飛行実験がオーストラリア南オーストラリア州のウーメラ実験場で行われましたが、実験は失敗に終わりました。それからの3年は構造班長およびシステム班長として、原因調査、改修設計に没頭し、再挑戦を行いました。第2回打上げでは打上げ時の責任者も兼任し非常に胃の痛い作業でしたが、2005年10月10日に無事打上げとその後の飛行実験を完了しました。この業務からは、システムの信頼性向上とその保証方法を学ぶとともに、実験隊運営の難しさ、および一発物の怖さと成功したときの大きな喜びを得ることができたと思います。

この飛行実験後は、航空機構造の健全性および安全性の研究開発に従事しています。航空機の設計、製造、運用においては、国の安全審査を受け承認を得る必要があります。この安全審査の基準は、ライト兄弟が始めて動力飛行を行ったころから、多くの事故や経験に基づいて改訂されて來たものです。最近も高速性の追求や大量輸送の要求、新しい技術や材料の出現により、安全審査基準の改訂が必要となります。現在の業務では、特に航空機構造の信頼性を確保しつつ、長い年月(先日日本国内での営業運用を終えたYS-11は、40年近く飛んでいました。)安全に輸送を行うための基準作りのベースとなる研究開発を行っています。

## 5. おわりに

本稿を書くに至った経緯を記述する必要があります。航空宇宙技術研究所理事長および宇宙航空研究開発機構航空担当理事でいらっしゃった戸田先生からのお説教により、「しゃっちゅうの会」と言う定期的な情報交換会(焼酎の会がオリジナルの名前のようにですが。)に参加するようになり、そこで機友会事務局の佐々木洋子氏にお会いしたのが本稿を書くに至った経緯です。

理工学部の「機械工学科」が「機械科学・航空学科」に名前が変わった今思ふのは、「29年前にこの変化があったら、学生の頃からよりヒコーキに近づけたのに。」と同時に、「これから先、何らかの恩返しができれば」、この二つです。

## 略歴

1986年3月早稲田大学理工学研究科機械工学科専攻修士課程修了。同年富士重工業(株)入社。2001年4月独立行政法人航空宇宙技術研究所(現宇宙航空研究開発機構)入所、現在宇宙航空研究開発機構航空プログラムグループ主幹研究員。主として航空機構造の健全性・安全性に関する研究に従事。日本航空宇宙学会、AIAA会員、日本機械学会会員。



2002年7月小型超音速実験機第1回飛行試験時の打上場所にて

## INFORMATION

### 第24回 機友会ゴルフコンペ開催のご案内

今回の幹事は35年卒業の泉 智明(ゴルフ委員)様です。100年に一度の経済危機と言われていますが、この様なときこそ一堂に会いして健康と元気をアピールしましょう。ゴルフ愛好家の方々、同期の方を誘って一人でも多くの参加をお待ちしています。

- 日 時 2009年5月21日(木) 雨天決行  
場 所 川崎国際生田緑地ゴルフ場(旧川崎国際CC)  
集 合 8時までに受付を終了してください  
会 費 プレー費 16,000円(フロントにて前納)  
+昼食代  
参 加 費 5000円(受付にて前納)懇親会費+賞品代  
競技方法 新ペリア方式(ダブルリペア)

### 昭32年卒機友会懇親会

昨年該当者にe-mailまたは郵便でお知らせの通り下記にて開催します。機友会ニュースレターに掲載しました。各人に通知しません。

- 場 所 早稲田大学大久保キャンパス  
55号-2F竹内ラウンジ  
開催日時 毎年4月および10月の第三火曜日  
(13時から2時間)  
・平成21年4月第三火曜日(21日)  
・平成21年10月第三火曜日(13日)  
奮ってご参加ください。  
会 費 ¥2,000程度。酒類は大学構内では入手不可、持ち込みは可(ただし責任をもって後片付けを要す)

幹事有志:江口、井上、網野、岩井明、石岡、石浜、増田、福田、中山、笠本、大石、西野入

# パネルディスカッションに参加して

修士1年 鹿内 真樹（高西研）

12月、修士生活も8ヶ月が過ぎ、私の周りでは就職活動へ皆動き始めている頃でした。友人の中には夏にインターンシップへ参加した者や、既に面接を経験した者もいましたが、私は準備がなかなか進まなく、焦りを感じていました。そのような中、今回のパネルディスカッションに参加させて頂き、先輩方の貴重なお話を伺うことで就職活動への不安や焦りは大分解消されました。

今回のパネルディスカッションにおいて、私の印象に強く残った3つの質問と回答について触れたいと思います。

まず1つ目は「その企業を選んだ決め手」についてです。

- 正直に言うと、勤務地が東京だったからです（富士重工）
- 製品の種類が多いので、入ってからやりたいことが見つかること思ったからです（クボタ）

先輩方のこのセリフを聞いて私は少し安心しました。なぜなら、就職活動準備セミナーに行くと社会貢献や自己実現等を高いレベルの志望動機とし、そのような動機で選ばないと後悔することが多いと言われることがあるので、私はなかなかその動機を持つ事が出来なかったのです。そのような中、先輩方の実体験に基づく言葉を聞き、まず勤務地から探

すという方法でも良いのだと思えました。

- 化学の分野で機械の技術を活かしたかった（東レ）

といった先輩のように、自分の専門分野だけに捉われず学んだ知識を異分野でどのように活かしていくかを考えるということも、選択肢の内の1つであるということが分かりました。今後は視野を広げて探していくたいと思います。

次に2つ目は「仕事のどんなところが楽しいですか」という問いついて

- 仕事は楽しくない
- 仕事は辛い
- 楽しい
- 単純に楽しいとは言えないが達成感は感じる
- 辛さも達成感も感じる
- 達成感

との回答がありました。これらの回答を踏まえ、浅川先生が仰っていた「楽しいことはお金を払ってやる。お金を貰ってすることは達成感ということなのでしょうね。」という言葉も印象的でした。私はこれまで、仕事が楽しくなければ長く働くことは出来ないのでないか、自分自身が楽しくなくては良い製品を作ることは出来ないのでないかと考えていました。しかし、お話を伺うと仕事にお

いては楽しさよりも達成感を感じる場面の方が多いようです。これは私がまだ学生であり、アルバイトとして働いてることと社員として働くこととの意識の違いによるのだと思います。もちろん、職場が楽しく仕事が楽しければ言うことはありませんが、社会人として働いていく上で、責任や苦労からくるやりがいや達成感を得られるかどうかという点も基準に入れることが重要だと分かりました。

そして3つ目は、「学生時代にやっておくべきこと」という問いついてこの問い合わせに対する回答で多かったのは

- 基礎学問の勉強をしっかりとする
- 問題意識を持ち積極的に行動する

ということでした。この2点をしっかりとすることで「やりきった」「努力した」という自信につながるのだと思います。さらにそれが就職活動だけでなく学生生活、研究にも良い効果をもたらしてくれるのだと思います。残り1年程となった修士生活を充実させるために、以上のことを実践していきたいと思います。

最後に、後輩のために貴重な時間を割いて参加していただいたOBの方々に厚く御礼申し上げます。そして、私もパネリストとして呼ばれても恥ずかしくないようなOBになれるよう努力していきたいと思います。



# 100

100th ANNIVERSARY

SCIENCE and ENGINEERING  
早稲田大学理工学部創設100周年

WASEDA UNIVERSITY

# 理工学部 創設100周年



2008年は、理工学部創設100周年の年であり、これを祝う式典が開催されました。

早稲田大学は1908年の創設25周年を機に、日本で初めて「理工」の名を冠した「早稲田大学理工科」を開設しました。この年の4月に理工科予科の創設を決め、5月6日付けで文部省の認可がおり、直ちに予科の授業が開始されました。機械・電気・採鉱・建築・応用科学・土木の六科を置くこととし、まず機械工学と電気工学の両科が設置され、その後他の学科が設置され発展してきました。

開設以来、本部キャンパスにあった理工学部は、大学創設80周年記念事業の一環として、1963年より現在の大久保の地への移転が進められ、現在に至っています。

また、2007年からは、3学部3研究科と総合研究所（理工学研究所と材料技術研究所）を擁する理工学術院に再編成し、教育、研究のいっそうの充実を図っています。

創設100周年を祝う記念式典が11月9日（日）盛大に大隈講堂で開催されました。

プロローグ：理工100年の歩み「去来百節」

（写真スライドショウ）

舞台の大きな画面に理工学部の歴史的写真が次々映し出されました。画面構成は小畠正好氏、バックの音楽は菅野由弘氏の作曲のこと。

1. 雅楽・電子音響とロボットの舞：理工100周年記念作品「北斗西流」

菅野由弘（理工学術院教授）氏の作曲による壮大な音楽は雅楽と電子音響が競演する構成になっています。雅楽は伶楽舎の方々が古式にのっとり優雅に演奏しました。曲の途中から写真に示すように二台のロボットが舞台の両側から登場し、音楽にあわせてこれも優雅に古式の舞を舞いました。これには、式の参列者も非常に驚きましたが、次第に違和感が消え、理工学部にふさわしい出し物という感じがしました。

二台のロボットはそれぞれ菅野重樹研究室および高西淳夫研究室の開発したロボットであり、電子音響は山崎芳男教授、及川靖弘教授が製作し、音響イフェクトは橋本

周司教授のお世話になったとのことです。

2. 記念式典：山川創造理工学部長の司会で進められ、最初に橋本周司理工学術院長が式辞を述べられ、続いて白井克彦早大総長の挨拶があり、来賓の祝辞へと進みました。

はじめは文部科学省高等教育局私学部長河村潤子氏、続いて東京電力株式会社顧問（元副社長）種市健氏、さらに東京大学副総長岡村定矩氏による総長小宮山隆氏の祝辞の代読があり、最後に慶應義塾長安西祐一郎氏が同時中継によりスクリーン上から祝辞を述べられました。最後に応援部が登場、校歌を合唱して記念式典は閉会となりました。

引き続いて、リーガロイヤルホテルにて、祝賀会が開催されました。



「北斗西流」を演奏する伶楽舎の方々と舞を舞うロボット

# 工場見学

工場見学も回をかさね、第6回JAXA  
第7回早稲田大学本庄キャンパスでした。  
いつも卒業生の方々にお世話になり、感謝しています。

## JAXAの見学会について

あこがれのJAXAの見学の日を迎えるました。集合場所の京王線調布駅から徒歩20分位かけて「調布航空宇宙センター」にやっとたどり着きました。

2008年4月1日付で組織改正され現在の「調布航空宇宙センター」となったそうです。主に調布航空宇宙センターでは、基盤技術・宇宙技術・航空技術の3つからなっています。

最初にセンターを紹介するビデオを見てから2班に分かれて見学しました。飛行シミュレーションでは現実の飛行機と同様な感覚をパイロットに対して与える装置だそうで、実際にコックピットに座って体験しました。

画像の動きの視覚効果だけで臨場感がひしひしと伝わって来て自分がパイロットになったようでした。また体験後は酔っ払いのように少しふらふらしていました。

その後地上エンジン運転試験設備を見

学しました。この設備は、わが国で始めて開発された航空機用ターボファンエンジン「FJR710」の運転試験を行うために建設されたものだそうです。

次の見学は2m×2m低速風洞実験室で1つの装置に付加価値を与える3つの実験を実施できるように設計されているそうです。実際の実験しているところは見られませんでしたが、中に入ることが出来ました。

その後、センターのシャトルバスで三鷹の飛行場分室に行きました。ここでは航空機の安全性の向上・環境適合技術などの研究を進め日本にふさわしい次世代輸送機の可能性について日々研究されています。

また、展示室では音より速く静かな超音速機の実現に向けてマッハ2の飛行機と共にマッハ5の飛行機の模型が展示されてい

ました。そんな速い飛行機が日本から世界に向けて飛ぶんでしょうか……。

その後はお決まりになりました懇親会を飛行場分室の中の懇談室でJAXAの人達と一緒にぎやかに楽しく行いました。

この見学会の実施にあたって特任教授の戸田先生にたいへんお世話になりました。

紙面を借りてお礼を申し上げます。有難うございました。参加者は31名でした。

(文責 オリーブ)



## 本庄キャンパスの見学会について

理工キャンパスから大型バスを借りて本庄キャンパスの見学に行きました。

バスの中では博士課程永田研究室の切川卓也さんの用意した資料をもとに説明があり予備知識を十分に頭に入れてからの見学でした。どうして本庄なのかですが……。

いまから40年前、当時の大濱総長が都の西北にキャンパスを広げたいと言う構想がありました。いろいろ事情がありやっと1982年に本庄高等学校が設置されその後1996年に郵政省(当時)との共同研究の構想が高まり「国際情報通信研究科」を皮切りに「環境総合研究センター」「環境・エネルギー研究科」「芸術科学センター」次々に設置され皆さんを見学された現在の様子になりました。

特に「環境・エネルギー研究科」は機械系の大学院と言つてもあって永田先生を始め多くの機械系の先生が関与されています。地球上に起こりうる、環境・資源・エネルギーに関する問題をテーマに積極的に展開する機関として大いに期待されています。また新幹線本庄早稲田駅周辺の開発も進み、本庄市と共に環境というアイテムで社会系も含めて今後集約していくこうと思っています。

見学は広大な構内を約2時間かけ終了しました。帰りのバスの中で参加者一人一人から感想をいただきました。研究成果を期待する声も多々ありましたが、先輩として厳しいお言葉もありました。

切川さんがしっかり受止めていたと思います。最後はお決まりの懇親会を理工キャンパスの馬車道で行いました。またこの席に永田先生が出席してくれました。

参加有難うございました。皆さんどこか見学したい所ありますかー！

機友会にメールください。検討したいと思います。

(文責 オリーブ)



# 機友会 ゴルフ コンペ開催報告

第22回機友会ゴルフコンペは、平成20年5月15日、いつもの川崎国際生田緑地ゴルフ場で46名の参加をもって開催されました。今回も5名もの初参加者を迎えることが出来ました。

当日は快晴無風で絶好のゴルフ日和、プレーも順調で和気あいあいで楽しい一日を過ごすことが出来ました。

幹事としては 前日・当日のキャンセルが相続ぎマスター室に4度も行く羽目になり 13組中6組が3人でしたがマスター室のご好意で同期の組合せを崩さず13組のままスタートさせていただきました。

競技の結果は 参加2回目の大沢氏(40年卒)がネット72で優勝、準優勝は大柴氏(37年卒)が81ストロークで8回目のベスグロ賞と共に受賞されました。

競技後の懇親会ではその日はプレーは出来ませんでしたが江口氏(昭和32年卒)から旭日小勲章の受勲報告がありました。

これは江口氏の多年に渡る金属プレス業界の業績に対し贈られたもので、氏から直接お話を聞くことが出来ました。

続いて成績発表・賞品授与となりましたが今回は過去最高の特別賞が揃いました。

成績発表は 毎回11位から行い参加

者の寄贈品の中で好きなものを選んでもらっていますが今回は 江口氏からの桐の箱に入ったワインを初め高級ワインが数本、またドイツ製の折りたたみナイフセット等参加者の皆様から寄贈していただいたこともあり優勝から10位まではゴルフ委員会で会費の中から用意した賞品をお渡ししますが委員会で用意した6位以下のものより参加者からの寄贈品の方が遙かに良い品物が並びました。

成績の11位から20位くらいまでの方は特別賞の内容に満足されたのでは……。

特に11位から16位の受賞者は賞品選択に長い時間を掛けられており次の順位発表を待つ方から「早く選べ!」「後がつかえているぞ!」等冷やかしの声が上がるほどでした。

最後に事務局からの報告と次回のコン

ペ予定日をお知らせして、懇親会は終了しました。

最高の天気、旧友とのプレー、諸先輩方との懇親会、豪華賞品等に参加者全員満足されたと思います。

この機友会コンペ100名目標を目指しておりますので同期への呼びかけをお願いいたします。

機友会コンペは初参加でも優勝できますので優勝を目指して参加ください。お待ちしています。

50名近くのコンペの幹事は大変だとお思いでしょうが、ゴルフ委員会がバックアップしますので安心して優勝してください。



第22回大会幹事  
古庄 進 ゴルフ委員  
(昭和42年卒)



## —機友会ゴルフコンペは元気で楽しい同窓会、ぜひ参加を—

昨年11月6日(木)、雲ひとつない秋晴れの中、第23回ゴルフコンペは恒例の川崎国際生田緑地ゴルフ場(名匠井上誠一氏設計の地形を生かした名コース)で開催されました。今回、44名の参加をいただき、12組のゴルフコンペでした。

コンペはダブルペリア方式で行われ、泉知明氏(35年卒)が優勝(グロス83)、準優勝は古庄進氏(42年卒)、3位は初参加の加藤泰昭氏(40年卒)、ベスグロは古庄進氏(グロス80)でした。

用意した賞品、および皆さんから寄贈していただいた賞品で、参加者全員に賞品をお渡しすることができました。寄贈していただいた方々、ありがとうございました。

懇親会は機友会副会長の石岡氏(32年卒)の挨拶から始まり、機友会ゴルフ新委員長の泉知明氏の挨拶、そして恒例の浅川先生(41年卒)の大学近況報告が行われました。

最年長参加者の佐野氏(26年卒)の音

頭で乾杯とともに、懇親会はまさに楽しい同窓会となり大いに盛り上りました。

今回、幹事をやせていただいて感じたことですが、機友会ゴルフ会の最大の特徴は元気で楽しいシニアの人たちであふれていることです。このことは最近、野球、ラグビー、駅伝等で、大活躍している元気な早稲田大学を象徴しているようで大変嬉しいことです。

今回の参加者の平均年齢は66~67歳となります。しかし、この平均年齢は早稲田大学創設者、大隈重信の「人生125歳説」からすると、まだ半分を経過したにすぎません。

最近のゴルフ界では、17歳プロの石川遼

君やタイガーウッズ等の若手が注目を浴びていますが、それはプロの世界の話であります。アマチュアの世界では、如何に元気に楽しくゴルフを続けるか、また年齢と共に味のあるゴルフを楽しむかだと思います。

その意味で、機友会ゴルフ会は最高です。機友会ゴルフ 万歳!!!

「ゴルフの唯一の欠点は、面白すぎる」とだ」(イギリス諺)

次回の機友会ゴルフコンペは5月21日(木)です。ぜひお誘いあわせて、ご参加を!!!



第23回大会幹事 大沢 茂樹  
(昭和40年卒)



## ホームカミングデーの報告

例年の通り、機友会は、早大ホームカミングデー（2008年10月26日開催）に本部キャンパス内に懇親会場を設け、来校された会員の便宜を図りました。当日の来校者は大学主催の記念式典を済ませ、キャンパスに設けられたにぎやかな模擬店を見物してから、機友会の部屋に集まりました。午後1時半に杉島会長の歓迎の挨拶で会が始まり、今年は、まず新任の3先生（内藤健先生、佐藤哲也先生、手塚亜聖先生）より着任のご挨拶があり、続いて、理工学部再編後の最近の学科の状況について、機械科学・航空学科からは浅川基男教授、総合機械工学科からは梅津光生教授の説明があり、みな静かに聞き入っていました。斎藤猛先生の音頭で乾杯のうち懇談にはいり、最後は校歌を齊唱してお開きとなりました。約100名の方が参加されました。

なお今回のホームカミングデーの招

待者卒業年度は下記の方々でした。

〈卒業後50年目〉

昭和34年（1959）卒業の方

〈卒業後45年目〉

昭和39年（1964）卒業の方

〈卒業後35年目〉

昭和49年（1974）卒業の方

〈卒業後25年目〉

昭和59年（1984）卒業の方

とお褒めいただいております。

（文責 萩須 吉洋）

### 40年卒業の方へ

10月18日はホームカミングデーの日です。

11時から記念会堂において式典が行われ、その後13時より7号館-220教室で機友会主催の懇親会があります。

また、16時からはリーガロイヤルホテルで40年卒業懇親会の開催を予定しています。詳しくは後日各自に連絡をします。

45年前にさかのぼり大隈庭園を眺めながらみんなで旧交を温められることを祈念しています。

幹事 真下 進

次のホームカミングデーは本年10月18日に開催されます。招待者の卒業年次は昭和35年卒、昭和40年卒、昭和50年卒、昭和60年卒です。多数ご来校のうえ、機友会の会場へもお寄りください。毎年参加されている機友会相談役の田島清瀬名誉教授から、機友会の会合は毎年参加者が増え活発になっている



## 機友会イブニングサロン

2008年10月9日

### 「自動車の環境・エネルギー技術に関する将来展望」

大聖 泰弘 先生

私達が学生の頃は「クルマ」と「オーディオ」は最高の憧れで給料の大半をこの関係に注ぎ込んだものでした。「クルマ」はクーペスタイルでチューンアップされたエンジンを積んで、建設が始まった高速道路をぶっ飛ばす夢を見ていたものでした。この頃の「クルマ」のエンジン周りは至って簡素で若干の知識があればアマチュアの私達でもエンジン調整をしたり、部品を交換したり、修理をしたり出来たものでした。今、自分の「クルマ」のボンネットを開けて部品を交換したり、エンジンの調子を見て変更したり出来る人はそう多くはないでしょう。このエンジン構造の複雑化を進めたのは ①大気汚染から環境問題になった排気ガスのクリーン化であり ②地球

温暖化に歯止めを掛けるCO<sub>2</sub>削減（燃費低減）であり ③交通事故死増加に歯止めを掛ける安全対策であった、と思われます。

以上の課題について、最新の研究現場から細かに課題解決の道筋と将来展望を解説していただきました。また先生から「クルマ」は軽くて丈夫なのが良い、大きい車と小さい車が衝突した時は優しくつぶれて生き残るのが良い、情報通信を活用してやさしい車社会の構造が望ましいなど、示唆に富んだご指摘も沢山いただきました。内容についてはかなり専門的で理解できないところも多くありました。最高の技術で出来上がった「クルマ」

で上手な運転技術（エコドライブ）を心掛ければ3つの課題解決にも貢献できることも分かりました。

地球温暖化防止の決めてCO<sub>2</sub>を50年で50%削減することも満更夢では無いとの、お話を今後の「クルマ」の技術開発の将来性に期待していきたいと思いました。

（文責 瀬谷 丞）



# 機友会トピックス

## 松浦佑次先生を偲ぶ“アルプス思い出鉄道”

昭和40年卒 真下 進（松浦研）

35年ほど前の秋、ストックホルムから乗車した夜行寝台列車の車窓から見えたのは、黄一色に染まった木々の間に降り注ぐ木漏れ日だった。その帰途ハノブルグの街中の模型店で01型というドイツのSLの模型を目についたとき思わず旅の記念に購入したのが鉄道模型を始めたなり染めでした。それというのも松浦研究室時代、お正月に同期の数名と先生宅を訪問し応接間を快走する欧洲型鉄道模型を見せていただい時の感動が忘れられずいたからでした。早稲田大学機械科のみならず日本塑性加工学会長として超多忙の中で、製作され続けている趣味の奥深さだった。とりわけ小生は蒸気機関車の動輪とロッドのメカニズムの精巧さに見とれてしまったことを覚えている。残念なことに先生は14年前の平成6年4月27日に他界された後先生の奥様から、主人の遺言として渡す物があるので取りに来て欲しいとの連絡を頂いた。家内とお伺いし、先生のお嬢様共々思い出話にひたりました。その時、奥様が“主人の遺言よ”と言われ、いただいて来ました。

形見の機関車を眺めていてレイアウトを作成してみたいという願望に駆られておりました。中々時間もとれずまた場所的な制約もありましたが平成9年に宇都宮に転勤になりマンションの1部屋に漸く、欧州の四季の変化を取り入れたレイアウトが出来上がりました。松浦先生の形見の機関車や欧洲旅行の記憶の中から“アルプス思い出鉄道”と名づけたそれはHOゲージと言われる、1/87スケールのものです。先生の手作りの機関車はきれいにガラスケースに飾られていたが鉄道模型と言うよりも工芸品に近く、当時の先生の製作技術は日本鉄道模型界でも有名で、真鍮板に穿孔する動輪軸受穴の加工精度の高さや熱歪を残さない半田付け技術は今でもメーカーで称賛されるほどで、清家清、水野良太郎、加山雄三等の著名人と並びよく専門誌をにぎわしていた。

宇都宮から移設された“アルプス思い出鉄道”は、昨年11月初めて同期の高草木夫妻、藪内、山本、瀬谷、そして佐々木洋子嬢に見学され松浦先生の思い出話で気持ちのよい

秋の一日を堪能しました。先生の形見の機関車と共に今日もまたアルプスの山々を元気に走り回っています。



松浦先生



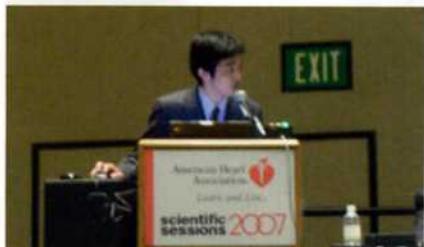
昨年11月に我家で撮った記念写真

## 他大学から見た早稲田らしさ

2004年卒 末弘 淳一（梅津研）

私は2004年に早稲田を卒業し、その後、東京大学大学院に入学しました。博士課程まで進学したので、早稲田で過ごした学部4年間より、東京大学で過ごした月日が多くなったことになります。そんな私に昨年末頃、機友会誌の執筆依頼が舞い込んできました。テーマは「国立大学と私立大学の違い」。私学の雄といわれる早稲田大学と最高学府といわれる東京大学。普段から比較されることも多いですが、そのなかで私が感じる違いは、

**早稲田大学は教員、職員、学生がいて、大学がある。  
東京大学は大学があって、教員、職員、学生がいる。**



という雰囲気です。

東京大学に進学した当初、非常に驚いたことがあります。それは事務に書類を提出しに行ったときのエピソード。職員の方から「忙しいので後にしてください」と言われたのです。事務が多忙な時期の出来事で「後で提出してもらえると助かります」という意味だったのですが、なかなか理解に苦しみました。いわゆるカルチャーショックでした。そのような事務的な対応も普段から周囲にあれば常識的なものに感じていたかもしれません。しかしながら、私がそれまでいた環境ではそのようなことはなかったのです。

何事にも親身に相談に乗ってくれる先生方がいる。

休憩中や時間外でも早く対応してくれる職員の方々がいる。

このような環境を早稲田では“当たり前”的として経験してきました。一方で、この“当たり前”は他大学には普通にないことなのです。このような“当たり前”が成り立つ

のも、立場にとらわれることなく人間関係を築ける雰囲気が早稲田にはあるからだと思います。教員－学生の関係、先輩－後輩の関係、OB－在学生の関係、すべてにこの雰囲気が共通しています。早稲田の名の下に意気投合ということは私たちにとって“当たり前”的なことですが、他の環境でそのようなことはなかなかないものです。

東京6大学野球を応援するなら、今はどちら応援するの？と聞かれることがあります。私の答えはもちろん早稲田。思い入れてもものは過ごした時間の問題じゃないのです。かけがいのない大学生活をたくさんの方々に支えられて送れたこと、それが現在の私の早稲田に対する想いに繋がっているのだと思っています。



## 万年幹事の独り言～31年続く新年会～

昭和52年卒 望月 徹（中根研）

「どうも」、「よお！」、「本年もよろしく」。今年も1月3日はこんな挨拶で始まった。卒業以来31年続いている同期の新年会だ。場所は新宿の東京大飯店。（現在は昨年の全面改装に伴いTokyoDaihantenとハイカラな表記となっているが）

昭和52年中根研究室卒業生で始めたこの会の発起人はU君で、ほとんどの卒業生が地方に赴任するなか、在京のU君と私との二人で幹事を務めた。会には井口研の有志も参加してくれた。やがてU君は米国駐在となり、以来私が全面的に幹事を引き受け現在に至っている。当初の通信手段は「家の電話」であり、年末になると実家に戻って来ているはずの仲間に「手書きの名簿」を片手に一軒づつ電話をするのは結構な労力であった。今は電子メールによりずいぶん楽をさせてもらっている。

「同期の新年会を30年一回も欠かさすこと

なく続いている」と言うと、感心されることが我ながら良く続いていると思う。その理由を考えると、早い時点で開催日時と場所を固定したことや電子メールの普及による通信の利便化などもあるが、なによりも開催の連絡を待ちにしてくれるみんなのお陰だとつくづく思う。「連絡待ってたよ」、「もちろん参加です」、「いつもありがとう」。これらの言葉にどれだけ励まされたことか。こちらこそ皆さんにお礼したい。

31年の間には次第に連絡が取れなくなったり、病気などにより失ってしまった仲間もいる。逆に昨年からは在学中大変お世話になり、定年退職された元職員の森本さんに参画いただいたり、今年はオリーブの愛称でおなじみの佐々木さんにも出席いただくなど、新たなメンバーも迎えている。この新年会は参加してくれる仲間がいる限り私のライフワークとして生涯幹事を務めさせていただくつもり

りであり、連絡が取れなくなっている同期のみんなや当時お世話になった院生・職員のみなさんなどで、この記事をみて懐かしく思っていたけたら機友会事務局まで連絡してもらって、次回にはぜひ一緒にできればと思う次第です。

最後に今回執筆の機会を下さった現在機友会事務局に勤務している佐々木さんに深く謝意を表する。



## 第28回モビリティシンポジウム開催について ～モビリティの将来を拓く多様な自動車技術～

早稲田大学環境総合研究センター 石 太郎（昭和42年卒）

平成20年後半から本年にかけて、100年に一度とも言われる世界的な厳しい経済危機に陥り、自動車産業も大きな影響を受けておりますが、そのような逆境を乗り切るためにこそ技術力を発揮する必要があります。そのような技術力を確認すべく、理工学部創立100周年の節目となる平成20年、11月15日（土）、早稲田大学理工学研究所モビリティ研究会（代表：総合機械工学科・大型泰弘教授）の主催、創造理工学部総合機械工学科・早稲田機友会・次世代自動車リサーチセンター（環境総合研究センター）の協賛により開催されました。総参加者約300名が早朝から集い、例年同様最新技術の発表と熱心な討論が行われました。

今回は、コモンレール付き大型ディーゼルエンジンに対するFAME混合油の影響解析（日野）、第2世代乗用車用ディーゼルエンジン（i-DTEC）の紹介（ホンダ）、高効率クリーンディーゼルコンセプトITIC-PCI（マツダ）等の最新ディーゼル技術、最新CVTの燃費向上技術（日産）、最新パワートレインに対応した排ガス計測システムの動向

と今後の展望（堀場）、TOYOTA Stop&Start Systemの紹介（トヨタ）、次世代低公害車開発・実用化促進事業の概要（交通安全環境研究所）等、7編の発表が行われました。

さらに、特別講演“2050年は江戸時代～大江戸リサイクル・エネルギー事情から学ぶ～”（江戸研究家・作家 石川英輔氏）では、リサイクルと省エネをとことん追求した江戸時代の庶民の知恵が紹介されました。続いてパネルディスカッション「企業ブランドとグローバリゼーション」〔司会：小林（早大・一橋大）、パネリスト：森尻（インド・マンガロール大）、法木（早大）、C・ボカリエ（早大）〕が行われ、厳しい状況の今こそ、個人も企業もすべての自動車関係者は自信を持って“日本らしさ”を打ち出していくべきとの共通認識が導き出されました。早朝から夕刻まで内容の濃い發

表や論議が行われました。今回のシンポジウムも盛会とすることができます、その後の懇親会でも熱心な意見交換が続きました。

次世代のモビリティ社会における自動車の役割もますます重要になっております。次回もこのようなテーマに焦点を当て、2009年11月中の土曜日に開催する予定です。開催が近づきましたら機友会と理工学部のHPに開催案内を掲載致しますので、皆様のご参加とご支援をよろしくお願い致します。



## サポート費のご協力有難うございました

2008年度も多くの方々からサポート費のご協力をいただき、1月末現在130名の方々と2グループから2,459,270円の納入をいただきました。誠にありがとうございました。厚く御礼申上げます。

特に、昨年叙勲を受けられた江口昌典氏（昭32年卒）、故和田稻苗先生のご遺族からは多額のご厚志を賜り、また、ゴルフ大会、ホームカミングデー等の場や、クラス会において参加者からのご協力をいただきたいへん感謝いたしております。

時を同じくして、理工学部創設100周年記念募金も行われ、重ねてのお願いに多くの方のご理解・ご協力により機友会活動の大きな支えとなっております。

年々、機友会活動も活発化をきたしておりますが、特に学生の研究活動やサークル活動も各方面での活躍が目覚しく、これらに対し少しでも役に立つべく出来るだけの支援をして行きたいと考えています。

決められた機友会の会費のみではこのような活動の支援にはたいへん苦しい状況です。今後とも皆様の多大なるご支援・ご協力を賜りたくお願いする次第であります。

なお、昨年ゴルフ大会第20回大会を記念して作成しましたマーカーがまだ若干在庫がございますので、サポート費を納入いただきご希望の方にはお送りいたします。

### 2008年度 サポート費納入会員（敬称略） (2009年1月末現在)

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
昭和11年	兵頭健次	昭和30年	岩本正弘	昭和33年	佐渡弘一
昭和13年	小林信男	〃	大石栄	〃	高瀬幸夫
昭和14年	高木三郎	〃	角張常二	〃	恒吉成隆
昭和15年	北郷文彦	〃	岸政吉	〃	中沢和之
昭和18年	山本章	〃	佐藤宣夫	〃	福岡正年
昭和19年	中上千秋	〃	鈴木孝	〃	吉田利光
昭和20年	大野正光	〃	田中實	昭和34年	久野耕司
〃	齊藤孟	〃	新美正臣	〃	久保光生
〃	宮崎直道	〃	服部源二	〃	石塚健雄
昭和21年	松原雅道	〃	福井郁三	〃	金子見三
昭和22年	宇津宮幹雄	〃	森垣英彦	〃	土肥忠政
〃	石沢和夫	〃	矢杉正明	〃	長沢孝夫
〃	齊藤孝	〃	柳沢内	〃	柴山哲男
〃	清水八郎	〃	若尾昭	〃	中川嘉恵
〃	田村献	〃	渡辺忠彦	〃	橋本宥司
昭和23年	古林浩	昭和31年	石井三博	〃	堤田廣嗣
〃	津村喜代治	〃	織茂芳三	〃	山口智久
昭和24年	滝嶋政雄	〃	光野豊	〃	山路裕
昭和25年	小沢秀夫	〃	高橋義男	〃	横尾宏
〃	齊藤義久	〃	渡仲稔	昭和35年	泉知明
〃	鈴木重雄	〃	野中太郎	〃	小澤勝
昭和26年	秋葉秀一	昭和32年	石岡真雄	〃	小野弘正
〃	稻村史朗	〃	伊藤神入	昭和36年	野池敬三
〃	石塚利一	〃	江口昌典	昭和37年	浅尾克治
〃	川野元	〃	楠山紀夫	〃	樺木金次郎
〃	倉石篤	〃	笛木久士	〃	早稲田季
〃	佐野武司	〃	篠崎利彦	〃	安田賢次
〃	瀬戸利通	〃	谷口直三	昭和40年	大沢茂樹
〃	長谷川政弘	〃	塙崎文雄	〃	加藤泰昭
〃	増田次郎	〃	中山準	昭和41年	岡部公一
〃	赤井民幸	〃	西村幹夫	〃	林洋次
昭和27年	新井保文	〃	間野健三	〃	矢貫徹
〃	安藤實	〃	宮本勝人	昭和42年	矢吹捷一
〃	杉島和三郎	〃	与儀実昭	〃	胡屋謙二郎
〃	藤嶋信一	昭和33年	相川義治	〃	田島克
〃	細井健司	〃	小川積幸	昭和44年	川口清
〃	柳田清吉	〃	大野敬	昭和46年	片山義雄
昭和28年	安梅哲郎	〃	鶴海陽太郎	〃	桑川博親
〃	加納節三	〃	香川達雄	平成6年	杉尾隆文
〃	多治見尚海	〃	樺山亨	平成17年	金城均
〃	福井未孝	〃	近藤芳夫	その他	和田鉛子
〃	本領泰弘	〃	桜井治男	〃	佐々木洋子
昭和29年	関英夫	〃	佐藤智士	〃	三十五会
昭和30年	石川吉通	〃		〃	32年卒一同

## 機友会会員の皆様へお願ひです

2008年10月1日発行の30号でお知らせしました会費規定変更の件ですが本年4月より実施されます。

今まで卒業後50年を過ぎると会費免除になっていましたが、今年度よりこの制度は無くなりました。ただし昨年50年を迎えた昭和34年までの卒業生の方々についてはいままで通りです。

昭和35年卒業生からは一律1年間3,000円を納入していただきます。

4年間一括の割引も無くなりました。1年間か4年間で納入するかは選択してください。

銀行引落しの場合はいままで通りです。

会費納入の状況はニュースレター送付時の住所シールを見てください。

169-8555  
新宿区大久保3-4-1

早稲田太郎様

○○○○年まで納入

住所シール

○○○○年まで納入あるのは、ここまで納入が済んでいますと言うことです。

わからない時、自分の記憶と異なる場合は事務局までお問合せください。

上記の件は財政の健全化のためご理解いただきたいと思います。

また、振込用紙は郵送の際、全員に送付してますので、納入期間を必ず確認してください。不要の場合は破棄してください。

## 会員訃報

08年10月以降に下記の会員の訃報について連絡がありました。

ここに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

卒年	氏名	逝去年月
昭14	旧機械 高木三郎	2004.8
昭15	旧機械 浅野猛	2008.1
昭16	旧機械 松田政之	2007.12
昭17	旧機械 平井増彦	2006.6
昭18	機械 林哲爾	2006.6
昭19	機械 吉田謙二郎	2006.
昭21	旧機械 平野国雄	2008.3
昭22	機械 齊藤孝	2008.9
昭23	機械 濑戸利通	2004.6
昭24	機械 貝本久	2006.6
昭24	専機 鈴木隆	2008.8
昭24	機械 山岸芳夫	2008.10
昭27	機械 舛本好章	2003.6
昭27	機械 荒川隆	2004.12
昭27	機械 藤村彬	2008.6
昭28	機械 青山孝之	2003.11
昭28	機械 吉田文生	2005.3
昭28	機械 原良雄	2006.11
昭29	機械 長尾定治郎	2008.6
昭30	一機械 安藤英弥	2008.9
昭31	二機械 長尾保	2007.8
昭32	一機械 石橋定男	2008.8
昭34	二機械 同部幸	2007.
昭34	一機械 土肥忠政	2008.10
昭35	一機械 堀清二	2008.8
昭52	機械 齊藤義郎	2007.11
昭52	機械 高崎育夫	2008.6

## 事務局からのお願いとお知らせ

### 総会のお知らせ【5月16日(土曜日)】です

本年の総会は5月16日（土）の1時30分より55号館N棟1階大会議室に於いて行います。

昨年は理工100周年を迎えたが、さらなる飛躍のため卒業生の協力のもと機友会も努力して行きたいと思います。今回は活躍している卒業生の講演も考えています。

詳細については、機友会ホームページに掲載しますのでご覧ください。学年幹事・研究室幹事の方々には、はがきにてお知らせします。

### ホームページアドレスのお知らせ

<http://www.kiyukai.mech.waseda.ac.jp>

事務局からのおしらせ、見学会、イブニングサロン等のお知らせもしています。

現在、ホームページを開けたときのカウントを付けていますが、利用は少ないようなのでたまに見てください。

### 会費納入のお願い

#### 【会費は4年間分12.000円 1年間分3.000円です】

今回、会費規定が変わり割引額がなくなりました。詳しくは本号の記事（機友会会員の皆様へお願い）を読んでください。

機友会の事業活動は皆様方からの会費を財源に運用していますので是非納入をお願い致します。郵便局か下記銀行へお振込ください。

三菱東京UFJ銀行 新宿通支店 普通口座 №2460079

りそな銀行 新宿支店 普通口座 №1375963

※お振込の際は、同姓同名があるので、卒年・氏名（カナ）を必ずご記入ください。

### 編集後記

前号の編集を終った後に未曾有の経済危機が全世界を覆いました。

会員諸兄にもいろいろ影響があることだと思います。機械工学科の卒業生の進路選択にもいろいろな影響を与える出来事であります。そのような中で編集した本号ですが、いろいろ興味ある記事を満載しました。是非ご愛読ください。

（編集担当理事 萩須吉洋）

### 会費の自動引落しのお知らせ

会費納入に便利な（銀行自動引落し）窓口を設けています。会費は1年間2.750円と少しだけですがお安くしています。ご利用される方は申込み用紙をお送りしますので事務局までご連絡ください。

### 住所変更があった時はご連絡ください

事務局から発送する郵便物が受取人不明のため返却されることが、たいへん多くなっています。個人情報保護法の問題もあり確認がたいへん困難を極めています。お手数ですが住所・勤務先変更が生じた時は、事務局までE-mailまたはFAX・TEL等でご連絡ください。

### E-mailアドレス変更をした時はご連絡ください

事務局から見学会、イブニングサロン等の案内をメールにてお知らせしたいと思っています。変更した時にはご連絡ください。

### 機友会E-mailアドレス変更のお知らせ

アドレスを何回か変更して、たいへんご不便をお掛けして申し訳ありませんでした。

今後は次のアドレスで固定したいと思っています。

**waseda-kiyukai@ktb.biglobe.ne.jp**



63号館の風景

### 機友会事務局

月、火、木、金 の10:00~17:00  
伊藤、佐々木、瀬谷

〒169-8555

東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田大学理工学部内55号館S棟2階

電話 03-3203-4141(大代表)内線73-5252

TEL/FAX 03-3205-9727

E-mail waseda-kiyukai@ktb.biglobe.ne.jp

<http://www.kiyukai.mech.waseda.ac.jp>

### WME ニュースレター vol.31

発行元 早稲田機友会編集委員会

印刷 神谷印刷株式会社

〒171-0033 東京都豊島区高田1-6-24